

商いの新しいものさし

(株)商い創造研究所
代表取締役

松本 大地

第159回

量販店衣料はどこに向かっべきか

2024年2月初旬、セブン&アイ・ホールディングス(HD)傘下のイトーヨーカ堂(IY)が北海道、東北、信越地方からの17店舗の撤退を発表した。旧ヨーカ堂は全国で123店のうち26年2月までに33店舗を閉店する計画があり、中部や近畿などでも閉鎖店舗が出る可能性が高いと報じられた。

1970年代は多くの人が中流だと意識した「一億総中流時代」と呼ばれ、団塊世代が家庭を持ち、子育てする時期と重なり、ファミリーは消費

費の中心だった。いち早くアメリカのショッピングセンター(SC)では、シアーズやJCPペニーなどGMS業態が核店舗となり、2000年当時はSC全体リース面積の30%強を占めた。日本の総合スーパー(GMS)も、80年代後半から10年、つまりSCの核店舗として全国に展開し、ファミリーの暮らしを支える生活インフラの役割を果たした。しかし、量販店のファッション衣料品は徐々にユニクロ、しまむら、西松屋など低価格衣料品専門店にシェアを奪われ続けてきた。

そんな最中に、IYの衣料品売り場でアパレル国内3位のアダストリアと専用ブランド「F O U N D G O O D (ファウンドグッド)」を展開することが明

らかになった。期待したのは、売上高ではなく買上客数を増やせるからだ。新たな展開が支持されれば、新規とリピーターによって買上客数が増えていく。支払う金額に対し、商品、価格、店舗環境、接客が期待以上の価値があると感じてもらえるかが問われる。

忘れてはならないのは、過去の2つの衣料品での教訓だ。1つは、IYグループは百貨店を経営していた時期がある。IYが米国ロビンソン社と提携してロビンソン・ジャパンを設立し、1985年に春日部市に1号店が誕生した。以降、90年宇都宮店、94年札幌店、2000年9月にはタイナシティWESTの核店舗として4店目のロビンソン小田原店と続いた。

その後、宇都宮、札幌が閉店し、13年に西武春日部店、西武小田原店となったが、16年には春日部店が閉店し、小田原店は18年に閉店した。

タイナシティの前身のダイドープラザが開業したのは1993年。IY小田原店を核店舗に専門店を構成し、97年にIY小田原店の年間売上高は約154億円を記録した。開業時に見込まれた年間売上高約85億円をはるかに上回ったが、その年がIYのピークだった。ロビンソンはダイナシティWESTの核店舗を担ったが、同時期に御殿場プレミアム・アウトレットが車で約30分の場所に開業し、ファッションブランドは大きな影響を受けた。ロビンソンから西武に売り場が変わっても浮上することはなく、デベロッパは撤退した床に専門大型店や飲食・物販・サービスの専門店を誘致した。今春には新たにアネックス館を増築し、ファーストリテイリング専用の大型区画をオープンさせる。紆余曲折ありながらも、ダイナシティは神奈川県西部地区を代表するRSCとして歩みを続ける。

2つ目の教訓は、06年に伊勢丹にてカリスマバイヤーと呼ばれた藤巻幸大氏をIYの取締役執行役員衣料事業部長として招き入れ、既存のプライベート・ブランドを統廃合して「pbi(ペービーイー)」が立ち上がった。IYの衣料品売り場が生命線になろう。



今春オープン
のダイナシティアネックス館

「F O U N D G O O D (ファウンドグッド)」を展開

することが明

タイナシティの前身の

ダイドープラザが開業した

のは1993年

IY小田原店を核店舗に

専門店を構成し